



イスラエルの戦争——Part 2 神のご加護

by アミール・ツアルファティ

<https://youtu.be/y6qkZiAfb4c>

.....

【6日間戦争】

1967年の春、10年近く続いた比較的穏やかな日々した後、イスラエルは、近隣アラブ諸国4ヶ国との戦争が寸前に迫っていることに気づきました。アメリカ合衆国は、交渉を通して戦争を避けるように説得を試みましたが、ナセルやアラブ諸国のその強い敵意を剥き出しにした発言と行動を止めさせることは出来ませんでした。戦争の寸前まで、ジョンソン元大統領はイスラエルに警告しました。

「イスラエルは、自ら進んで単独で動かない限り、孤独ではない。」

そして、戦争が起こると、国務省は発表しました。

「我々の立場は、思想、発言、行動において中立である。」

さらに、アメリカ合衆国がイスラエルに物資を空輸している、と、アラブ人たちが偽の訴えをしている間に、ジョンソンはこの地域に対して、武器貿易禁止令を課しました。イスラエルのもう一つの主な武器提供国であるフランスもまた、イスラエルへの武器販売を禁止しました。それとは対照的に、ソビエトは大量の武器をアラブ人に提供しており、同時にクウェート、アルジェリア、サウジアラビア、イラクの軍隊も、兵士と武器をエジプト、シリア、ヨルダン、フランスに提供しました。

1967年6月5日、やはりイスラエルは孤独でした。しかし、軍司令官は見事な戦略を思いつきます。12人の戦士を除く、イスラエルの全空軍が朝7時14分、イスラエルの空軍基地から離陸しました。エジプトのパイロットたちが朝食をとっている間に、エジプトの飛行機を破壊するためです。2時間以内に、およそ300機のエジプトの戦闘機が破壊されました。数時間後、イスラエル兵士たちは、ヨルダンとシリアの空軍を攻撃、同様にイラク国内の軍用飛行場も攻撃しました。第一日目が終わる頃には、エジプトとヨルダンの空軍全体と、シリア空軍の半分が地上で破壊されました。戦争は地上戦となり、エジプトとイスラエルの装甲部隊による史上最大規模の戦車戦が、シナイ砂漠の厳しい条件の中で行われました。戦前のあらゆる予測に反して、戦争が終わる頃にはイスラエルの支配領域は3倍になり、ユダヤ人たちは、長年彼らに向けてテロ攻撃が頻繁に襲ってきた場所から、父祖たちが何千年と暮らした地へと帰還しました。死者数や損失は大きな痛手でした。しかし、全貌と比べればごくわずかです。信じられないほどの敵を前に、ユダヤ人国家は奇跡的に勝利しました。歴史書は、何百年にわたる戦争や、30年戦争について、また、他の多くの長期戦について伝えていますが、ここでは一つの国が、たった6日間の戦争で、一国のみならず4ヶ国の強力な敵を完全に大敗させたのです。世界中のユダヤ人たちが、その時起こった偉大な奇跡を、神に感謝しました。そして、多大な誇りと霊的目覚め感が、世界中のユダヤ人達を包み込みました。

6日間戦争によって最終的に、イスラエルの領土は4倍になりました。これは前代未聞の勝利でした。この地球の歴史上、これほど短期間に領土を4倍に広げた国は、いつの時代にもどこにもありません。問題は、この勝利を与えてくださった方、神の栄光と誉れを、自分たちのものとしてしまった事でした。

現場の将官や司令官たちによる、とんでもない失敗の数々にもかかわらず、そして、戦場での考えられないような数々の奇跡にも関わらず、戦争が終わると、全ての栄光と誉れは、将官たちが受け取りました。イスラエルの人々は、神そのものではなく、馬や、戦車を信頼し始めました。その誇り、高ぶりの空気が、イスラエルの歴史の中の闇でした。私たちはあまりに得意となり、高慢になっていたため、ゴルダ・メイア（書記注：第5代イスラエル首相。ロシア・キエフ出身。1898生～1978没。在任期間1969～1974）の所にわざわざ密かに来て、シリア、エジプトからの攻撃について知らせた自分たちの味方・フセイン国王（ヨルダン）すら信頼しませんでした。

【消耗戦】

1967年7月1日、エジプトは、スエズ運河近くのイスラエルの軍事基地を砲撃し始めました。

1967年10月21日、エジプトが、イスラエルの駆逐艦エイラートを撃沈。死亡した47人の中には、私の叔父ヨセフも含まれていました。その日は、彼の19歳の誕生日でした。1年も経たぬうちに、エジプトの砲撃は、スエズ運河沿いのイスラエル軍事基地を攻撃し始めました。ナセルは、イスラエルの大半が備蓄に頼っているため、長期に渡る消耗戦には耐えられないだろうと考えました。彼は、イスラエルが経済的重荷に耐えられないと考え、また続出する死亡者によって、イスラエルの士気が下がると思ったのです。たくさんの血が流された長期戦はおよそ3年続き、イスラエルは15機の戦闘機を失いました。ほとんどが対航空機銃やミサイルで撃墜されたのです。

1967年6月15日から1970年8月8日までの死者総数は、兵士が1424人、それと一般市民が100人以上でした。そして、2000人の兵士と、700人の一般市民が負傷しました。

聖書には、詩篇20:7にこうあります。

7 ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

（詩篇20:7）

残念ながら、私たちは国家として馬といくさ車を信頼し、私たちの神、主の御名を誇りませんでした。すぐに、また確実に、痛みが襲ってきました。我々は、ユダヤ暦の中でも最も聖なる日に、攻撃を受けたのです。

1973年、10月6日、ヨム・キプール戦争です。

【ヨム・キプール戦争】

1973年のアラブ—イスラエル紛争は、ユダヤ暦上最も聖なる日、ヨム・キプールに始まったことから、ヨム・キプール戦争としても知られ、およそ4週間続きました。

1973年、10月6日、この年のこの日は、イスラムの聖なるラマダンの月でもありました。エジプト、シリア率いるアラブ連合は、イスラエルに対して合同奇襲攻撃を仕掛けました。ヨルダンは不参加を決め、

イスラエルにとっては前線が3箇所ではなく、2箇所であることは有意義で、戦う機会を得ました。ヨム・キプールの習慣は、イスラエルが軍を召集するのに不都合だったのではないかと思う人もいるでしょう。しかし、実際は様々な面において、都合が良かったのです。ヨム・キプールの習慣上、国中でほとんどの人が自宅かシナゴークで断食をしていました。この事もまた、これが奇跡であった事を証明しています。このため、突然の動員にも、予備兵の居場所がすぐに分かりました。ほとんどの人がラジオを聴いておらず、当時自宅に電話があるのは稀でしたが、いくつかの場所へ電話をし、バスや公共の場で呼びかけることで、召集が円滑に行えました。日中の静寂さも手伝って、バスの騒音に気付いた予備兵が、状況の確認に出て行きました。David Yinni 司令官に関して、何千回と語られてきた出来事は、シリアとの戦いから兵を撤退させようとしていた時、彼は自分たちが地雷原に踏み込んだことに気づきました。奇跡が起きなければ、生きてそこから抜け出せないことを知りながら、兵士たちは腹ばいになり、銃剣を使って地雷を爆破させることなく見つけようとしていました。ある時点で、一人の兵士が心からの祈りを捧げました。すると、突然にして嵐が吹き荒れ、兵士たちはしゃがみこんで嵐が去るのを待ちました。その間に、土の大半が嵐によって吹き飛ばされて、地雷が露わになりました。そして、兵士の全員が無傷で逃れられたのです。数々の似たような出来事によって、以前の戦争と同様、イスラエルは到底克服できそうにない戦争に、最後にはなんとか勝利することが出来たのです。

地上のこの場所からイスラエルを滅ぼし、我々の存在を終わらせようとする動きが止むことは決してありませんでした。

【第一次レバノン戦争】

イスラエルは北部国境の平安を求めています。しかし、テロリストの避難場所となっていたレバノン軍事基地が、それを不可能にしています。

1978年3月、PLO（パレスチナ解放機構）のテロリストがイスラエルに潜入。彼らは、イスラエルの海岸を歩いていたアメリカ人観光客を殺害した後、民間バスをバスジャックしました。バスがハイウェイを走行する最中、テロリストは窓越しに射撃。イスラエル兵がバスを捕えると、テロリストは銃で応戦し、これによって合計34人の人質が死亡しました。報復として、イスラエル軍はレバノン国境を越え、国南部にあるテロリストの拠点を占拠し、国境からテロリストを追放しました。イスラエル防衛軍（IDF）は2ヶ月後に撤退し、国連軍の参加を認めました。しかし国連軍は、その地域へのテロ集団の流入を防ぐことが出来ず、新たに、更に危険な戦闘を生み出しました。イスラエルの攻撃と襲撃は、PLO軍の増大を食い止めることが出来ず、ガリラヤは大変な状況に陥り、何千人もの住民が自宅を逃れ、多くの時間を爆弾シェルターで過ごすことを余儀なくされました。イスラエルは、一般市民の住む場所が攻撃され、多数の死者を出すのを待たず、テロリストに報復しました。

6月6日、IDFはレバノンに進み、「ガリラヤの平和作戦」として、テロリストを追放しました。初めのイスラエルの作戦の成功で、PLOをレバノンから広く追放し、高官たちは国々との平和条約調印にこぎつけました。

1983年、レバノンの大統領アミン・ジェマイエルが、イスラエルとの平和条約に調印、一年後、シリアはジェマイエルを強制して条約を破棄させました。その後、IDFがベイルートを占拠し、ヤセル・アラファトとそのゲリラ軍を包囲したことで、戦いは長引きました。

6月中旬、イスラエル兵は西ベイルートの一般市民が多く暮らす地域で陣を敷いていました。6,000～9,000人のテロリストを包囲し、レバノン戦争はイスラエル内に激しい論争を引き起こしました。戦争に関して、意見の一致が見られなかったのは、イスラエル史上初めてでした。戦争終結の要求が高まる中、メナハム・ベギン首相（書記注：第7代イスラエル首相。ロシア領ブレスト・リトフスク出身。1913生～1992没。在任期間1977～1983。1978年、ノーベル平和賞受賞。）は辞任しました。国家連合政府が1984年就任し、レバノン撤退を決断。南レバノン軍が、イスラエル国境付近の安全地帯を警護するのを助けるため、わずかばかりの兵士が残されました。IDFが、PLOをレバノンから追放するのに成功しましたが、この国からのテロの脅威は終わりませんでした。戦争には犠牲がつきもので、1982年6月5日から1985年5月31日までの間に、1216人の兵士が死亡しました。

2000年5月24日、イスラエルは南レバノンから全部隊を撤退させ、そこでの22年間の軍事駐留を終えました。全イスラエル防衛軍と、南レバノン軍駐屯地は避難しました。イスラエルの撤退は、国連とその構成員によって進められ、イスラエルが国連安保理決議425の義務を履行したのです。

【第一次インティファダ】

モスクから出た、イスラエルに対する残忍行為及び扇動の偽の告発によって、インティファダが始まりました。

1987年12月6日、ガザで買い物をしていたイスラエル人が刺殺されました。翌日、ガザのジャバリア難民収容所の住民4人が、交通事故で死亡。その4人は、イスラエル人によって報復として意図的に殺されたという噂が、パレスチナ人の間で広まり始め、12月9日の朝、ジャバリアで大規模な暴動が起こりました。その暴動で、軍のパトロールに火炎瓶を投げた17歳の少年が、その後イスラエル兵によって殺され、直後から西岸地区、ガザ、エルサレムが不穏な空気に包まれました。翌週を通して、領地全域で投石、道路の閉鎖、タイヤ燃やしが報告されました。この暴動で、12月12日までに6人のパレスチナ人が死亡、30人が負傷しました。翌日、暴徒は東エルサレムにあるアメリカ領事館にガソリン爆弾を投げました。これによるけが人は出ませんでした。ガザでは、イスラエル兵によって負傷させられたパレスチナ人の少年が、テルアビブ近郊の軍事病院に運ばれ、抹殺されたとの噂が広がりました。また、イスラエル兵たちが、ハーンユーニスにある貯水池に毒を入れたという噂も出回り、国連職員が「それは事実ではない」と伝えました。重傷を負ったパレスチナ人だけが、ガザ地域の外に運び出されて治療を受けることが出来るのであって、中にはそれによって一命をとりとめた人もいます。水質調査も行われ、汚染されていない事が分かりました。インティファダは、初めから暴力的で、暴動初めの4年間で、火炎瓶による攻撃が3,600件以上、手榴弾攻撃が100件、銃や爆破物による攻撃600件が、イスラエル防衛軍によって報告されました。暴力は兵士にも民間人にも同じように直接向けられ、この時点で16人のイスラエル市民、11人の兵士が、領土内のパレスチナ人によって殺害され、1,400人以上の

イスラエル市民と、1,700人以上のイスラエル兵が負傷しました。およそ1,100人のパレスチナ人が、イスラエル兵との衝突で死亡しました。

【第二次インティファダ】

2000年9月28日、リクード党首アリエル・シャロンが、神殿の丘を訪れました。ここは、ユダヤ教の最も聖なる地であり、イスラムでは、第三聖地として、ムスリムがハラム・シャリーフと改名しました。その時以来、パレスチナ人は暴動を繰り返しており、これはアル=アクサー・インティファダと呼ばれています。

2001年5月22日、アリエル・シャロン首相は、状況を鎮め、見返りにパレスチナ人がイスラエル人に対する激しい攻撃を止めることを期待して、一方的に停戦を宣言しました。ところが、パレスチナ人は攻撃を激化し、特にその対象をイスラエル市民に向けました。ヤセル・アラファトは、攻撃を止めることも抑えることも一切行いませんでした。イスラエルが全ての報復を控えていた10日間の間に、70回以上の攻撃があり、イスラエルの停戦の間、パレスチナテロリストの活動は、テルアビブのディスコで起こった自爆テロを機に、最高潮に達しました。6月1日、20人が死亡し、90人以上が負傷しました。大半が10代の若者です。恐ろしい攻撃が、圧倒的な国際圧力を生み出し、またイスラエルの報復攻撃を恐れて、アラファトはついに停戦を宣言しました。

ニューヨークのワールドトレードセンターと、ワシントンにある米国国防総省の建物を爆撃した、2001年9月11日の後、アラファトは漸く真剣に動きだし、テロリストを逮捕し、警察を使って攻撃を防ぐようになりました。

【第二次レバノン戦争】

第二次レバノン戦争は、2006年の夏の間、イスラエルとレバノンのヒズボラとの間で、1ヶ月続いた紛争です。ヒズボラのゲリラ兵たちが指揮する、卑怯な国境越え襲撃によって扇動され、この襲撃で彼らは8人のイスラエル防衛軍兵士を殺害、他の2人を拉致しました。戦いは両方ともに多大な損失をもたらし、最終的には結論の出ないまま、8月14日、国連の仲介で停戦に合意、2006年9月8日、イスラエルがレバノンの海上封鎖を解除した時に、正式に終わりました。総じて、イスラエルは兵士を、誘拐された2人を含め121人失い、600人以上が負傷、一般市民の44人が殺害され、1,500人近くが負傷しました。概算にばらつきはあるものの、イスラエルは600人以上のヒズボラ戦士を殺害したと報告しています。戦争の間、何百というロケットが路地に着弾し、一家が家や居間を出た直後、まさに彼らが数分前にいたその場所にロケットが着弾するなど、数多くの奇跡が記録されました。

【ガザ地区におけるハマスに対する作戦】

イスラム政党ハマスが、2006年1月のパレスチナ議会選挙で勝利し、パレスチナ議会で過半数の議席を獲得した時、イスラエルとパレスチナの紛争が激化しました。イスラエルは、大幅な人の流入と多くの輸入、そして輸出を防ぐため、ガザとの境界を封鎖しました。パレスチナは、ガザ地区境界付近のイスラエル入植地に向けて、カッサムロケット（書記注：構造が簡素な、手作りのロケット弾）を発射し続け、

イスラエル兵士を殺害、または捕える目的で襲撃しました。

襲撃の一つは、2006年6月25日、パレスチナがイスラエルの兵士 Gilad Shalit を捕え、そのため、イスラエルはハマスを狙った空爆を含む、大規模な報復を行いました。2007年6月、ハマスとファタハの内戦が勃発し、ハマスは武装クーデターを設定し、ガザ地区を支配することでその権力を強固にしました。続いて、ガザ紛争 2007 としても知られる、2007年6月7日から15日の間に起こった激しい戦いでは、118人のパレスチナ人が殺され、550人が負傷し、ガザ地区全体がハマス政府の支配下となりました。ハマスが占拠して以来、ガザ地区のパレスチナ武装集団とイスラエルは衝突を続け、パレスチナ武装集団はイスラエルにロケットを発射し、子どもを含むイスラエル市民を殺害、他を負傷させ、同時に社会基盤施設にダメージを与えています。

この堪え難い状況のために、イスラエルは過去5年間の間に、3つの軍事作戦を行いました。2008年から2009年に「キャストレッド作戦」、2012年に「防衛の柱作戦」、最後の2014年夏の「境界防衛作戦」は新手であり、なおかつイスラエルにとっては非常に危険な、ハマスによって掘られた、ガザ地区からイスラエル領土までのトンネルを排除するためのものでした。それによって、50日間の戦闘で、30以上の異なるトンネルが破壊されました。

初めは、1970年代のフランスの援助を受け、核原子炉を建設しようとしたイラク政権でした。その原子炉が稼働する一週間前、イスラエルは空爆を行い、原子炉をその場で破壊、この世のこの部分に、核の大被害をもたらそうとする動きに、終止符を打ちました。その直後、イランが、今度は自分たちが自身の核プログラムを始める番だと、破戒されたイラク原子炉から学び、誰でも一回の空爆で破壊するのが困難になるように、核原子炉を至る所に拡散しました。イランの核プログラムは、今日でも、いまだに大きな問題です。世界政府は、イランに低質ウラン製造を認めることで、どうか妥協しようとしています。イスラエルは、イランは欺いている、そしてイランは全く違う事を計画している、と全世界に警告しています。欧米界の殆どの諜報機関の鼻先で、シリアはイランと北朝鮮の助けを得て、デリゾールの砂漠に、自身の核施設の建設を始めました。

2006年、イスラエルは最新衛星アモスを打ち上げました。その衛星から映像が届いたとき、シリア砂漠で、とんでもない事が行われていることが証明されました。農業用の道具と材料が運ばれてくるはずの、北朝鮮の船から荷降ろしされた荷物を積んだトラックは、砂漠の真ん中へと、真っ直ぐに向かって行きました。時間が迫っていました。イスラエルは、モサド代理人のチームを、シリア核プログラムのトップがいたヨーロッパのホテルに送り込み、そこで、彼のラップトップから貴重な情報を取り込みました。それがテルアビブで解析されると、それは、シリアが確かに、核原子炉施設をさらに深めていたことの証明となりました。イスラエルには、アメリカ合衆国や他のいかなる国の許可も得る為に費やす時間の余裕はありませんでした。そして、2007年9月、空爆を行い、シリアの核原子炉を完全に破壊しました。

最後に、イスラエルの現代史を通して、私たちは神の御手を見えています。ヨーロッパで、レムナント（残りの者）をガス室や、死の収容所から救い出す神の御手、かつては不毛不作であった地を、今では世界

で最も肥沃な土地の一つに戻した、神の御手。すっかり忘れ去られていたヘブル語を、世界中の 80 以上の異なる国から帰還した人々の、交流の手段として復活させた、神の御手。神の御手は、生まれたての国としてのイスラエルの歴史を通して常に置かれ、66 年以上も、神はそこにおられました。

聖書にはこうあります。

4 見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。

(詩篇 121:4)

イスラエルの人々は強く、回復力があります。

イスラエルの人々は、神の偉大なる御手が彼らを守り、彼らの必要をすべて満たしてこられたのを見ています。私たちは神が預言者アモスを通して、その 9 章でイスラエルに与えられた約束を握りしめています。

14 わたしは、わたしの民イスラエルの捕われ人を帰らせる。彼らは荒れた町々を建て直して住み、ぶどう畑を作って、そのぶどう酒を飲み、果樹園を作って、その実を食べる。

15 わたしは彼らを彼らの地に植える。彼らは、わたしが彼らに与えたその土地から、もう、引き抜かれることはない。」とあなたの神、主は、仰せられる。

(アモス書 9:14~15 新改訳 1970 年版)

アーメン。

メッセージ by Amir Tsarfati/Behold Israel : <http://beholdisrael.org/>